

マックス・ヴェーバー

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

—— 読書体験として

校長 水上 信廣

大学に入った最初の年であった。そもそも社会科学とは何であるのか、まったくわからないままに、いわば「記念読書」をするつもりで、この有名な本を読んでみようと思ったのである。著者のマックス・ヴェーバーといえば、カール・マルクスと並んでドイツの誇る社会学者——知の巨人といわれる人の学術論文だ、おそらく歯が立つまい、と思つて読み始めたが、これが面白い。思わず引きずり込まれて、気がついたら、読み終わっていた。今思うと、一種の知的興奮に見舞われたのである。読書体験という言い方があるが、必ずしも文学の世界だけとは限らない、社会科学や歴史や哲学の世界でも、著者その人や、問題意識や、論を進める方法との固有の出会いがあり、読者にとって大地震に遭遇したような経験、すなわち、文字通り、体験をするということがある。そのような意味で、私にとって『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫）は忘れられない一書となった。

著者ヴェーバーはこの本の中で次のように論じる。

一六、七世紀の西欧は資本主義の勃興期にあたるが、このとき、プロテスタンティズムの浸透した地域において、とりわけカルヴィニズム（の中でも特にピューリタニズム）の奉ずる予定説が、禁欲的な職業倫理（エートス）を持つ市民を生み出し、彼らは、資本主義的営為に、その牽引的・推進的な役割を果たすことになった。この禁欲的な職業倫理は、資本主義の発展とともに、やがて世俗的・一般的な資本主義の「精神」になつて行く。同じキリスト教でも、カトリックやルター派に見ることのできない、カルヴィニズムに特有の、勤勉な職業観はいかにして可能になったのか、またそれはいかにして「時は金なり」に象徴される資本主義の精神になり変つて行つたのか。——著者の神学的、心理的、歴史実証的な検証は、委曲を尽くして展開する。私はすっかりヴェーバーの虜になつてしまった。以後、学部の間、たえずヴェーバー

の何かを読んでいた。（といつても、ヴェーバーの膨大な業績はたった四年ぐらいでは読み切れるものではない。）大学院に進んでもからも友人と読書会をして、ヴェーバーの、とくに宗教社会学関連の論文を読んだ。このころ、「ヴェーバーとマルクス」問題がしきりに論じられていた、ということもある。ヴェーバーの歴史観は、マルクスの唯物史観を補完する役割を果たすものなのか、それとも、歴史のダイナミズムの考え方において、マルクスとは決定的にちがう独自のものなのか。

ヴェーバー自身は、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の末尾にマルクスの歴史観を「一面的」であると批判しながらも、自分の立場と今後の課題について慎重に述べている。

近代人は一般に最大の善意をもつても、かつて宗教意識内容が人間の生活態度、文化、国民性に対してもつた巨大な意義を、そのあるがままの大きさで意識することは殆どできなくなっているのが普通であるけれども、しかし——だからといって、一面的な「唯物論的」歴史観にかえて、これまた一面的な、文化と歴史の唯心的な因果的説明を定立するつもりなどは、もちろんない。両者ともひとしく可能なのであるが、両者とも、

もし研究の準備作業としてでなく、結論として主張されるならば、歴史的真理のためにほっとしく役立たないのである。

私はこうした問題設定に触発され、遅まきながらマルクスを読み始めたのであるが、とくに初期マルクスといわれる諸論考に思想的面白さを感じた。そして、修士論文はヴェーバーではなく、マルクスの、ごく最初期に著した『経済学・哲学草稿』の中に出てくる、ある特定の用語をめぐって書くことになった。しかし、私の関心事は、相変わらず、歴史的現実と思想および宗教の関係いかに、というところにあつたので、マルクスを読む場合もこの問題意識が頭から離れなかつた。ヴェーバーから教えられたことは多い。心情倫理と責任倫理、価値合理と目的合理。支配における伝統的支配、カリスマ支配、合法的支配の三類型。社会分析の方法としてのイデアール・タイプス（理念型）。『職業としての学問』や『職業としての政治』における職業倫理（エートス）。近代を「魔術からの解放」、「合理化」の過程としながらも、官僚支配とニヒリズムの行きわたる危機的時代とみならず認識。そして、耳に残っている印象的な言葉の数々。

『職業としての政治』の結びの一句は今でもそのまま思い出すことができる。

われわれは、（いたずらに待ちこがれているだけの）態度を改めて、自分の事に就き、そして「日々の要求に」——人間関係のうえでもまた職業のうえでも——従おう。このことは、もし各人がそれぞれその人生をややつている守護霊^{デーモン}をみいだしてそれに従うならば容易にまた簡単におこなわれうるのである。

振り返ってみれば、十代の終わりに出会った『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の読書体験の余震は、私の学生時代を通じ、さらに今日に至るまで、私の奥深いところではいまなおその鳴動が続いているようである。

了

追記

羽入辰郎著『マックス・ヴェーバーの犯罪』（ミネルヴァ書房2002年）なる本が刊行され、これに学術「賞」が授けられた。その論旨は、『プロテスタンティズムの倫理……』の中で、ヴェーバーがある事ながらを検証するにあつて、一次資料にあたらなかつたばかりでなく、資料を巧妙に操作して自分の主張を裏づけた、というのである。一読した感想をいえば、木を見て森を見ずの議論で、ヴェーバーを犯

罪者呼ばわりして得意げな様子は品位に欠ける、というより滑稽である。「賞」を与えた見識も疑われる。この書については、全面的な反論がヴェーバー学者折原浩によってなされ、『ヴェーバー学のすすめ』（未來社2003年）および『学問の未来』（未來社2005年）にまとめられている。最近、橋本努、矢野善郎編『日本マックス・ヴェーバー論争』（ナカニシヤ出版2008年）という本も出た。いずれも図書館に収められている。

参考文献（麻布学園の図書館にあるもの）

『世界の名著』 50 ウェーバー

尾高邦雄責任編集 中央公論

『社会科学の方法

——ヴェーバーとマルクス』

大塚久雄 岩波新書

『マックス・ヴェーバー入門』

山之内靖 岩波新書

（この本は、従来のヴェーバー像の転換を迫る、好著です）

特集 いのち（生命）

多様な死生観

社会科 鳥越 泰彦

ある一日だけをとってみても、世界中で多くの人が生まれ、そして死んでいる。そのような現象が、人類の誕生とともに起こって、そして今なお世界各地どこでも起き続けている。このように時間や空間を超えて普遍的に起きている出来事なのにもかかわらず、「いのち」や「生きる」こと「死ぬ」ことに対する人々の価値付けは、世界各地や時代ごとに異なっている。このようなことを改めて教えてくれる本が、ここで紹介する『死生観と生命倫理』（関根清三編、東京大学出版会）である。この本では、まず「死生観をふりかえる」として、旧約聖書、新約聖書、古代ギリシア、西洋（中・近世）、西洋（近・現代）、イスラーム、インド、中国、日本（近世）、日本（近・現代）の各地・各時代の「いのち」や「死」についての考え方がまとめられている。次いで「現

代の生命倫理」として安楽死や妊娠中絶、臓器移植、脳死などの問題が取り上げられている。もともとは東京大学大学院での授業をもとにつくられた本で、それゆえに悪くいえば、味気ない本（まさに教科書的）であるが、手際よく整理されているとも言える。

さて私の興味関心から、前半の「死生観をふりかえる」の部分を中心に紹介させていたきたい。まず最初に感じたことは、章立てに対する違和感である。相変わらず西洋中心なのは仕方ないとしても、西洋についてこれだけの項目を立てるのであれば、せめてイスラーム、インド、中国について複数の項目立てがあってもよいのではないか、その程度の学問的蓄積が日本にもすでにあるのではないかと思った。またなぜ最初に聖書が来るのかもよくわからなかった。さらに旧約聖書と新約聖書が分かれているのにも違和感があったが、これについては読み進むうちに納得ができた。神が人間に生命を与えたという絶対性は変わらないとしても、新約聖書、すなわちキリスト教ではイエスの死と復活という問題が大きくたちはだかるからである。ユダの裏切り行為によって、イエスを死に追いやって

しまった弟子たちは、イエスの復活によって新たな「いのち」を与えられる。このような信仰に生きる人は「死んでも生きる」（ヨハネ福音書）のである。ここにキリスト教独自の「いのち」に対する考え方をみる事ができる。

同じような一神教であるイスラームは、やはり人間は神が「泥土から創造され、息を吹き込まれたものである」と見なされているという。生きることも死ぬことも神の自由意志によるものであり、生かされていることの感謝として、人間は信仰を守るべきだとされている。

このような考え方は、頭で理解できていても、なかなか日本という風土に育った私にはすっーと入ってこない。その点、インドの輪廻思想の方は比較的理解しやすい。生きることはいまあるこの世を生きることだけではない。人間の行い（後に中国で「業」と訳される）がその人の次の「いのち」を規定する。地獄に行くかもしれないし、餓鬼や畜生になってしまうかもしれない。特に仏教を信仰しているわけでもない人でも、「生まれ変わったら」という言葉は口にするだろう。しかしそのよ

のように思う。

灰谷健次郎の本

理科（生物） 山本 恵美

私は生物の担当なので、生命科学の本を紹介することを期待されていたようだが、「命」というテーマを聞いて、どうしても頭から灰谷健次郎が離れなくなってしまったので、紹介することにする。

児童文学者である灰谷健次郎との再会は三年前のことである。私は高校三年生の担任だった。当時、二歳になるかならないかの長女を抱え、また二人目の子の妊娠もあった。すると当時のクラス委員のM君が、「僕、朝七時に学校に来て勉強しているから、毎朝、教員室に行つて時間割変更チェックして、クラス日誌を日直に渡しといてあげるよ。その代わり、毎日一題、生物の受験問題の添削をして。」と申し出てくれて、卒業までその役割をきっちり果たしてくれた（ご存知かもしれないが高三は朝礼がない）。そんな心優しいM君が「灰谷健次郎の『天の瞳』という小説の主人公の生き方にずいぶん影響を受けたんだ。」と言った。こんなにできた人間に影

うな「いのち」に対する考え方を私たちは自然と身につけているのである。また中国では老荘思想を中心に、「いのち」に対する考え方が紹介されている。万物を生かす陰と陽の気があり、その気が集まつてあるものが生きる。そしてその気が散じてそれは死ぬことになるが、また別の形で気は集まつて「いのち」となる。そしてそれを主宰しているのが「道」となる。そしてそれを主宰しているのが「道」だというのである。インドや中国の思想を概観してみると、やはり人間をさまざまな生物のひとつとして位置づける（人間に特別な地位を必ずしも与えない）という点に気づく。改めて各地の「死生観」をふりかえつてみて、いろいろな違いや特徴に感心したり、教えられたりしたが、しかし現代という時代になつて、特に日本では「死」というものが極度に隠されてしまつていことに気づいた。それは医学の発達之恩恵でもあるが、私が触れたいのは、むしろ社会的に「死」のなまなましさを避けようとする風潮についてである。もちろん私は人が死ぬのを見ることは嫌いだ。ましてやそれが近親者や知人ならなおさらいやである。しかし「死」から遠ざかつていくことは、結果として「いのち」に対する軽視を生んでしまうと思う。そのような意味では、人々が「いのち」に対してどのようを考えてきたのか、そして考えているのかを学ぶことは、今の時代にはとても大切なこと

響を与える本ってどんなだろうと思ひ、私も早速手にとつたというのがきつかけだった。

『天の瞳』（角川書店）は、小瀬倫太郎という少年の保育園時代から中学生時代に至るまでの成長物語で、かなり厚い単行本で八冊にもなる大河小説である。一九九六〜二〇〇四年に発表され、二〇〇六年に亡くなった灰谷健次郎の最後の作品で、未完のままになっている。読み終えて、「こりゃ参つた。こんな小説に影響を受けて育つたような人間に私はかなわん。」と思つた。

その学年の卒業式を終え、私は産休に入り、灰谷健次郎の本をいくつも読んだ。子どもを産むと涙もろくなるというが、『太陽の子』を読んだときは、ぼたぼたぼたぼた、次から次へと涙があふれて困つた。小学生のときに一度読んだ小説だったが、そのときもこんなに涙しながら読んだのだろうか。『太陽の子』は沖縄出身の両親を持ち、神戸で育つ明るいふうちゃんという小学六年生の女の子が主人公の物語。二次大戦下の沖縄で少年時代を過ごしたお父さんが、その壮絶な経験のために精神を病み、最後は自殺という選択をしてしまふ。他にもさまざまなつらい境遇の人が登場する。母に捨てられ、父も亡くなり、ひとり暮らしの姉の孤独死を体験した少年。沖縄戦で家族を亡くし、手榴弾で片腕を無くした男性。それでも、どの登場人物もやさしくて

温かい。つらい経験をしたからこそ、つらい人の気持ちがよく分かる。だからその分、人に優しくなれる。

灰谷健次郎の視点は、いつも、どんな人にも優しい。主人公をリンチするチンピラや不良少年に対してさえも、その人たちのつらい境遇、そうして生きざるを得なかった状況を常に理解しようとする。『私の出会った子どもたち』という本を読んだとき、灰谷健次郎がなぜ、こんなにも優しいのが分かるような気がした。灰谷健次郎は中学卒業後、貧乏のため高校に進学できず、体が小さかったために就職もできず、日雇いや臨時工員でその日暮らしをしていた。そのとき、雇用者や正社員に非人間的な扱いを受けたり、社会の最下層で生きる人々と共に生活することで、環境がいかに人間をねじ曲げてしまうか、嫌と言うほど見せ付けられた。また、一家の稼ぎ手で、家族全員に頼られていた長兄が自殺する。長兄を自殺に追いやった自分の罪を責め続ける。十七年続けた教員を突然辞め、沖繩に数年間の放浪の旅に行く。そこで沖繩戦で辛い体験をしながらも、底抜けに明るく優しい人々に出会う。灰谷健次郎の書く物語はすべて実体験に基づき、自分の心の奥の触れられたくない辛い過去を、さらけ出し、苦しみながら生み出した作品なのだろうと思う。だからこそ読者の心をこれほどまでに揺さぶる

のだろう。

まだ、灰谷健次郎の本を読んだことのない人がいたら、ぜひ読んでもらいたい。自分の命、家族の命、友人の命、社会的弱者と呼ばれる人の命、すべてを尊重し、大切にあげたい、そんな気持ちになると思う。

トスカの接吻

芸術科（音楽） 有川 文雄

オペラの筋は「いのち」を扱っているものが多い。「いのち」を奪ったり奪われたり、あるいは病気で死んだりする。「いのち」はオペラの筋書きの大きなテーマでもあるのだ。「愛」や「恋」の果てに死が待っていたりもする。では、「人が死ぬオペラ」と「死なないオペラ」で比べてみるとどうなのだろう。これから紹介するオペラの本で取り上げられている「オペラ厳選30作品」の中では、18対12で、やはり「人が死ぬ」方が多いようだ。例えばモーツァルトの「フィガロの結婚」では人は死なない。好色な伯爵が奥方に謝り、ブライドがへし折られる。しかし同じ作曲者の「ドン・ジョヴァンニ」では主人公つまりドン・ファン・テノリーオは、神をも恐れず

命を懸けて自らの欲望を貫き、男らしく！地獄に落ちてゆく。

またイタリアオペラの王者ジュゼッペ・ヴェルディは、登場人物が死ぬ名作を数多く作っているが、最後のオペラでは人の死ぬことのない笑えるオペラ、「ファルスタッフ」を作っている。ヴェルディと同時期のドイツオペラの巨匠、リヒャルト・ヴァグナーはとつもなく大きな作品である「ニーベルングの指輪（全四作）」を作ったが、その中で彼は、「神々によるラインの黄金」の奪い合い……つまり欲望によつて多くの登場者を死なせている。

その後の時代のブッチーニの「トスカ」では、主役三人が全員死んでしまう。その一面は名場面としてマリアカラスの伝説的な映像が残っているので見ることもできるが、ここで少し説明したい。

歌姫トスカの恋人で画家のカヴァラドッシは政治犯をかくまったとして捕らえられ、拷問を受けている。トスカに邪心を抱く秘密警察の長官であるスカルピアは、トスカの肉体と引き換えにカヴァラドッシを「形だけの銃殺」で助け、逃がしてやると迫る。それを「愛」のために受け入れたトスカに、「トスカ、君はもう俺のものだ」とスカルピアが抱きついた瞬間、「これがトスカの接吻です」とテーブルにあつたナイフで刺してスカルピア

を殺してしまう。そして恋人の「形だけの銃殺」に臨んだトスカは、目の前で倒れた恋人が死んだふりをしているものと思つて近づくが・・・スカルピアの狡猾な罫は実はカヴァラドッシを殺していた。絶望したトスカは自らサンタンジエロ城から身を投げる・・・というものがある。「愛」や「恋」が「いのち」を奪つてしまうという文学的なストーリーを現実的に描いている傑作である。

オペラの世界では、舞台上で多くの生と死を「ツール」として「使用」しながら物語が展開されている。いのちを題材に扱ふことや、秀麗気は重くシリアスになる。しかしそれによつて人々に感動を伝え、その作品に永遠の命を得させているのかもしれない。このように「恋」、「愛」そして「いのち」などを題材にした音楽作品・・・つまり「オペラ」を解説したわかりやすい本をここに紹介したい。その本とは・・・

小畑恒夫監修『図解雑学 オペラの名作』(ナツメ社) である。

この本は二〇〇八年の七月には図書館に入られて頂いているので、見た人も多いかもしれない。その後のPTAの「麻の葉セミナー・オペラを見よう」でも保護者を中心に触れさせて頂いた。でももう一度今度ももっと多くの方に紹介したいと思ひ再びここで取り上げることにした。それほど読みやすく、生徒で

も理解でき、大人でも楽しめる本である。

実はこの本の監修者は小生の大学時代の同級生である。ミラノに長く住み、オペラをその地で学び、「音楽の友」などに欧州オペラのレポートを送つていた小畑君は、現在は立派な音楽評論家として活躍している。図解雑学シリーズはすでにたくさん種類の本が図書館にあるようだが、この本の存在もお知らせしたい。

お書きに「多くの大作曲家が手がけ、クラシック音楽の華ともいえるオペラというジャンルを、わかりやすく、迫力のあるカラー写真と図解とCDで紹介しています。」とある。

この本はモーツァルト以後の多くのオペラを収めてあり、これを座右に置けばオペラを見に行く時にも非常に重宝するはずである。なぜならまず、わかりやすいということだ。イラストで登場人物の人間関係やその風体が描写されているし、台詞の「フキ出し」もあり、その絵もなかなか良い。また、重要なアリア(歌手が独唱でうたう歌)についても簡潔に解説してあり、CDも付いている。だからこの本を読めば、的確にオペラを楽しむことが出来るであろう。

では本の内容に沿つて軽く説明したい。パート1、2、3という分け方で括られている。

パート1は「オペラの名作を知る」である。

モーツァルトの「フィガロの結婚」からR. シュトラウスの「バラの騎士」まで「古いオペラ」から「新しいオペラ」まで、重要と思われるオペラを紹介している。本全体の三分の二が当てられている。

パート2は「キーワードでオペラがわかる」である。

「ヒーローと悪役」、「不倫と純愛」、「ハッピーエンドと悲惨な結末」などの項目や「純情な乙女から気の強い女王まで」、「三枚目から悪役まで」など、登場人物をさまざまな違う視点からとらえて、オペラを面白く、また親しみやすくなる様に紹介している。

パート3は「生のオペラを観に行こう」である。

ここでは、開場10周年になった東京・初台にある新国立劇場を具体的に紹介している。そのうえ海外の劇場のインフォメーションもある。また本の各所に「ミニ知識」と称していろいろな知識が豊富に盛り込まれている。この本を読んだ人は、DVDを借りて来るか、それとも本物のオペラを観に行きたいと思うことだろう。

ただ「生きる」ことさえ

困難な時代

理科（化学） 武神 一雄

昨年の末から世界的な不況による「派遣社員の切り捨て」が問題になっている。派遣社員というのは派遣会社から各企業に派遣された人達で、その企業の社員ではない。従って、企業側から見れば、労働力に余剰が出れば、切り捨てるのが簡単にできるわけである。

そもそも日本においては派遣社員という制度はあまり一般的ではなかった。二〇〇四年の小泉政権下で「労働者派遣法」が改悪されたことにより、製造業にも派遣を認めることになって、低賃金で労働力のコストが低い派遣社員が急速に増えていった。現在、労働力の $\frac{1}{3}$ 程度は、派遣やパート、フリーターなどの非正規雇用で占められているようである。

この結果、企業側からみれば、安いコストで労働力が得られることになり、特に製造業においては、安い労働力を求めて海外に進出していた工場を日本国内に回帰させるようになった。自動車産業においては北九州あたりに大規模な工場を建て、大量の派遣社員を雇い入れていたわけである。それがサブプライ

ムローンの破綻をきっかけにした世界不況の影響をもろに受け、生産調整のため大量の（八万五千人にもなるといわれている）派遣の切り捨てとなった。切り捨てられた人達は、住む家を追われ、低賃金であったため手持ちの金もわずかなものであり、路頭に迷い、生命の危機にも見舞われている。

このようになる前から、フリーターや派遣の悲惨な状況を訴えていた人がいる。これについては赤木智弘さんの『若者を見殺しにする国』（双風社）や雨宮処凛さんの『オールニートニッポン』（祥伝社）、『生きさせる』（太田出版）に詳しく書かれている。（いずれも図書館にあります。）

また、非正規社員の解雇のみならず、つい昨日（ $\frac{1}{2}$ ）のニュースで報じられたように、あの「SONY」が八千人の正社員の希望退職者を募ることや、産休や育児休業中の社員を解雇する会社が出てくるなど、より深刻さを増している。

このような「生命」にかかわる事態が、豊かといわれた我が日本で起こってくるとは誰が想像しただろうか。「フリーターや派遣にしかない人はあまり努力しなかった人なので、仕方がないのではないか」、「自己責任だ」という人達も多くいると思う。しかし、戦後の高度成長期以後の豊かなはずの日本では、このようなことはなかった。小泉政権の

ときに自由競争原理を労働界にも導入し、まるでアメリカのように貧富の格差を広げてしまった。アメリカの三大自動車産業（ビッグスリー）のCEO（トップ）の年収は日本円に換算すると数十億円にもなっていたという。こんなにもらっても使い道もないだろうと思うのだが。

しかし、今、「労働者派遣法」を廃止することも、仕事を分け合う（当然、一人あたりの賃金は減る）ワークシェアリングを取り入れることも、なかなか難しそうだ。また、ヨーロッパの一部の国で取り入れられている「同一労働、同一賃金」（派遣だろうと正社員であろうと同じ仕事をしていれば同じ賃金をもらえる）を導入することも困難であろう。

政治家がどう考えているかは知らないが、私は新しい仕事を創出するしかないと思っっている。余剰の労働力をこれに振り向けるわけである。

これからの日本で絶対必要なもの、「それは食糧の確保」だと思ふ。現在の日本の食料自給率は40%にも満たないらしい。（そのくせ食べ残しや賞味期限切れなどで20%の食糧をむだに捨てているらしい。なんたる国か、と思う。）穀物を多量に輸出しているアメリカやオーストラリアが、気候の大きな変動が予測されるこれからの時代に、いつまでも輸出を続けていられるかおぼつかないと思っ

いる。イギリスでも以前は食料自給率が40%台の時があったらしいが、現在は70%くらいまで回復させている。今、先進国は将来に備えて国外に農地を確保しているということだが、先日ニュースによれば、日本の半分ぐらいの人口の韓国でさえ国外に確保してある農地は、日本が海外に確保している農地の16倍であるらしい。このままにしておく、下手をすると日本人は飢えることになる。これからは農業を大事にしなければならぬ。今、農家はどんどん減っている。三ちゃん農業（じいちゃん、ばあちゃん、母ちゃんが働き手）といわれ、若い人には魅力のない状況になっている。このままではだめだと思う。国、地方自治体や企業などが遊休の農地を借り上げ、整備して若い人達に働いてもらう工夫をしなければならぬ。

石川英輔さんの『2050年は江戸時代』（PHP研究所）という近未来小説に、二〇五〇年の日本が自給自足の「農業国」になっている姿が描かれている。ぜひ、一読を推めたいと思う。

「文学」のすゝめ — 「生命」を描写する文学

国語科 松田 隆

この冬に読んだ本の中で、私にとって拔群におもしろかったのは、水村美苗『日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』（筑摩書房）であった。「生命」という今回のテーマからは少しずれるので詳細を紹介することは避けるが、高校生以上で日本語や英語、日本近代文学に関心のある人には手にとってもらいたいエッセーである。

その中の一節に、次のような言葉がある。

科学の進歩などが広い意味での「文学の終わり」をもたらすことはありえない。科学が進歩するに従い、逆に、科学が答えを与えられない領域—文学が本領とする領域がはつきりしてくるだけだからである。ほかならぬ、意味の領域である。科学は、「ヒトはいかに生まれてきたか」を解明しても、「人はいかに生きるべきか」という問いに答えを与えてはくれない。そもそもそのような問いを発するのを可能にするのが文学なのである。もし答えがないとすれば、答

えの不在そのものを指し示すのも文学なのである。いくら科学が栄えようと、文学が終わることはない。

近代以降、人々は「昔は宗教書にあった、『人間とは何か』『人はいかに生きるべきか』など、人間として問わずにはいられない問いに応えられる叡智にみちた言葉」を「文学の言葉」に求めるようになった」と水村氏は言う。

おそらく多くの人は長く生きる中で「人間とは何か」「人はいかに生きるべきか」という問いそのもの、あるいはそれに類する問いに行き当たることはあるだろう。ふとしたことをきっかけとして、自分自身について、あるいは自分を取り囲む多くの人々について見つめてみたときに、この問いは浮かび上がってくる。

もちろん、簡単に答えの出る問いではない。あるいは答えがないのかもしれない。が、すべての人が「人間」であり、「生きる」ものである限り、この問いと無関係ではいられない。宗教や哲学、歴史なども、あるいはこの問いを原点として、多くの人が長い時間をかけて考察してきた過程を表すものかも知れないが、文学は確かに「人間」を対象として、その生のあり方を描き出すものである。

「生命」というものに対する僕達の関心のあり方のひとつに、「生」そのものに対する

関心があるとしたら、なんでもよい、文学作品を手にとるとよい。小説、詩、随筆……優れた作品は「生」そのものの何かを写し出している。それは必ずしも読み手にとって心地よい「生」ではないかもしれない。生きることの過酷さ、生命の持つグロテスクさを描いているかもしれないが、「生のあり方」を描きだした作品は数多くあり、特に、何年も読み継がれている作品の中にそれは多いように思う。麻布の現代文でも多くの優れた作品を扱っており、図書館にも多くの文学作品が所蔵されているが、生徒諸君には多くの良い作品に触れてもらいたいと思う。

数多ある作品の中で、ひとつだけ紹介するのは非常に困難なので、この冬読んだものなかで、「生命」にかかわるテーマを持った随筆集として多田富雄『寡黙なる巨人』（集英社）を紹介しよう。

多田氏は『免疫の意味論』（青土社）で知られた優れた免疫学者であるが、二〇〇一年、突然脳梗塞に倒れ、右半身の重度の麻痺のみならず、言葉を失い、舌や喉の麻痺による摂食障害に陥ってしまう。本書は、病に倒れた氏がリハビリの中でワープロを習得し、不自由な体のもたらず苦痛に悪戦苦闘しながら書き上げた随筆集である。一つ一つの文章は短めで、言葉もつたないところはあるのだが、

逆にそのことが、苦しみながら数時間かけてこのエッセイを書いたということに現実味を与えている。

その中で浮かび上がってくる「生命」の姿とは、脳梗塞という病の恐ろしさというよりも、僕達が無気なくやっているささやかなこと——例えば、つばを呑みこむこと、咳をすること、歩くことといった何でもないことが、僕達にとっていかに重要で、「困難な」動作であるかということである。

嚥下えんげがうまくいかないとは、どんな苦しみなのかは、障害を持った人しかわかるまい。痰が絡んでも出せないのは、地獄の苦しみなのだ。

一例をあげよう。まず水が一滴も飲めないのだ。喉がからからに渴いても、水を飲むことができない。湿ったもので喉を潤すこともできない。医師からは注意されていたが、ある日不用意に水を飲もうとした。そのとたん激しくむせ、頭が真っ白になった。驚いたことに私は数ccの水に溺れた。

免疫学者である氏は当然医学的な知識に長けていたはずで、脳梗塞や麻痺といったものがどういうものかも知っていたはずである。が、自らの体を通じてそれを経験していったとき、それまでの自分の生を支えていたささ

やかなことひとつひとつの意義にあらためて気がつくのである。

また氏は、入院生活やりハビリを通して、患者の視点から日本の医療の現状とその問題に気づいていく。理学療法士が少ないために充分なりハビリが受けられないことや不自由な入院生活、あるいは医療を取り囲む行政の欠陥など、様々な問題が実際に彼に降りかかってくるからである。

このように書くと、本作が非常に暗い、陰々滅々としたもののように思われるかもしれないのだが、不思議とそうのように感じないのは、おそらく筆者の人物にもよるのではないかとと思う。たとえば、倒れた筆者の脳の状態を検査するために核磁気共鳴装置（MRI）に掛けられたときのことは次のように描かれる。

耳のそばで、ポカンポカン、ポヤポヤポヤと音がし始め、それがジーコジーコ、ガーガーというような音に変わった。何だか非現実の世界に入ってしまったようだった。やがて音はすさまじい騒音となり、私は助けを呼ぼうとしたが、声は出ないし、逃げることもなかできるはずがない。舌がよじれて喉に落ちこみ、およそ三十分後に息も絶え絶えになって救出された。

筆者の経験したことは恐怖そのものである

のだが（ちなみに私もMRIを受けたことはあるが、このような恐怖は感じなかったし、「すさまじい騒音」とは思わなかった）、その原因となる音の描き方は何となくユーモラスに感じる。闘病生活についても、もちろんその生活の実際は（明るい）ものではないのだが、積極的にリハビリに取り組む筆者の姿そのものや、〈お涙ちょうだい〉ではない文体によって、必要以上の〈暗さ〉は感じられない。

今、厚労省の役人に負けてはいられない。これも弱者の人権を護る闘いなのだ。私は自分の中の「巨人」にこう語りかける。今しばらくの辛抱だ。これまでの苦痛に比べたら、何ほどのことがある。戦え。怒れ。のた打ち回れ。「寡黙なる巨人」は声では答えることはできないが、心に深くうなずくものがあった。

筆者はあとがきを右のように閉じるが、その姿勢は戦闘的でさえある。そう姿そのものが筆者の「生命」のあり方を表しており、僕達自身の生のあり方に様々なことを問いかけてくるのである。

この随筆集は必ずしも「文学的」ではないかもしれない。また、若く健康な諸君にとつては関心が持ちにくいかもしれないのだが、筆者も自らなぞらえている正岡子規『病床六

尺』とともに、僕達自身の生そのものについて考えさせる一冊として諸君にも手にとつてもらえたらと思う。

『火の鳥』という生命

国語科 岡本 陽子

今回この「図書館だより」の原稿依頼を頂いて、テーマが「いのち（生命）」と見たときに、考えるよりも先に——それはほとんど条件反射といへば速度で頭に浮かんだ作品は『火の鳥』だった。

いやいや、いくらもはや偉人と称される手塚治虫氏の作品とは言えやっぱこれは漫画だし、何よりあまりに発想が安易で私の貧乏な読書歴がバレてしまう、それはちよつと恥ずかしいぞ、と、あれこれと別な作品を考えてはみたものの、まだ文字を覚える前から何度も何度も父の本棚にある単行本を取り出してはページをばっさばっさと広げ（子供なので「パラパラ」なんて上品な本のめくり方は知らない）、比喩でなく本当にぼろぼろにするまで読んだ『火の鳥』（雑誌型の単行本でしかも古いので、子供の容赦のない力技には耐え得らない製本）以上に、私の「いのち

観に関わっている作品はやはりない、という結論に結局は落ち着いた。多くの日本人が、『火の鳥』は、生命を描いた漫画である」とステレオタイプに考えるよりもおそらくもっと深いところで、それこそ私の生き方そのものにこの『火の鳥』に描かれた生命観は根付いているだろう。

と言うことでわざわざ紹介にあげるまでもない周知の作品とは存じてはおりますが、それでも『火の鳥』をご紹介しようという浅薄な知識をどうかご容赦いただきたい。

さてしかし、そんな幼少期を経て、一時期受験前に再びハマった頃があった、とは言うものの、それから長いことこの作品を読むことのないままは時は過ぎてしまったのだが、それが今回久しぶりに『火の鳥』を読み返してみても、あれ？ と思った。

『火の鳥』の中でも私が最も読み返し、ポロポロになつてきているのが、これまた最も定番で申し訳ないが、「ヤマト編」と「鳳凰編」なのだが（あと八百比丘尼伝説を下敷きにした「異形編」も好きだった。こうして見ると未来のストーリーには全く興味がなく、私が古い日本文学の道に進んだことにも大きく関わっているのかもしれない）、幼い頃にこれらを読んで感じたのは、「永遠の命に執着する人間の愚かさ」であり、「輪廻」という仏

教の思想による「現在の行いは、決して現
在だけでは終わらない」ということだっ
た。けれども今読んでみると、少し別
のことを思うのである。

もちろん作品を通じて描かれている
生命観には深く考えさせられるのであ
るが、それよりもむしろ今回は、こ
んなことは初めてのことであったの
だが、『火の鳥』という作品自体が
持つ「生命」というものを、強く感
じたのであった。

これだけ世代をまたいで多くの人々
に親しまれているこの作品は、おそ
らく読んでみれば、それぞれにその
生命観を与えながら読み継がれて
きて、そしてまた他人には分からな
いところでその人の生きる為の指針
になっていた、別の作品を生み出す
きっかけを作ってきたのだなあと
いうこと。

考えてみればまったく当然のこと
なのだが、それが作品のもつ「生命」
であると捉えたときに、なんだかと
ても目の覚める思いがしたのだ。実
存する肉体が永遠の命をもつことば
かりに幼い頃は目を奪われていた。

私の、自分でも意識しないような
深い深いところで、この『火の鳥』
は私を形づくっている。まるで食
物が自分の血となり肉となつてひと
つの命となるように。そうして形が
なくなつても、ずっとずっと私の中
に『火の鳥』の中の言葉は生き続
ける。それこそが、手塚

治虫が考える生命観、手塚治虫とい
う人間が生きていた証、そしてまた、
作品の持つ「生命」だなあと。

もちろんそれは、『火の鳥』だけ
に限った話ではなく、人の言葉（思
想）の全てにそういう側面がある。
しかし『火の鳥』は、始めに述べた
ように、生命というものについて描
かれた漫画であり、だからこそ数多
くの人の影響を与えている作品だ
ということに気がついたとき、特に
私を感慨深くさせたのだ。そういう
意味でまさに『火の鳥』という作
品は永遠の生命を持つていたのであ
つて、また手塚治虫はその「火の鳥」
を得たと言えるのかもしれない。

幸福にも私は、人に何かを伝える
という仕事に就けている。私の発した
言葉のほんのひとかけらでも誰かの
心に響いたら、永遠の命がなくとも、
私は生き続ける。私の中にある『火
の鳥』も生き続ける。手塚治虫も生
き続ける。こつやつて人はずっと生
きてきたんだなあとしみじみと思
いつつ、それではどうして人は、い
のちは、生まれてきたのだらうとい
う疑問は、いつ何度読んでもなくな
らず、そう思われるのがこの本の魅
力でもあるのだ。

ところで、これまでの話を全く無視
して、

作品そのものの内容に立ち返った
ときに思うのが、最近の人々は「火
の鳥」を望むのだろうかというこ
と。もちろん死ぬのが恐ろしいとい
う気持ちほどの時代も変わらないの
だろうけど、いつまでも普通のもの
だと思つていた生きることへのひた
むきさが、この頃なんだか薄くな
つてきているような気がする。と、
またステレオタイプなことを言つて
みました。

「死を熟れきつた生としてとら
えること」

国語科 廣瀬 武久

人間の一生は「かすかな光」を求
めて歩む疲れの喜びを知ることだ

私がこれから諸君に紹介しようとし
ている本は、あと一、二年で還暦を
迎えようとしている鳥取県在住の
医師・徳永進さんと詩人である哲
学者の谷川俊太郎との往復書簡を
一冊まとめた、至って面白い新書
『詩と死をむすぶもの』（朝日新
聞出版）であるが、私が昨暮れこれ
を読み終えて、いたく感動していた
矢先、本年の元旦の朝日新聞にた
またま谷川俊太郎が詩を寄せていた。
「かすかな光へ」と題するもので、
「あかんぼがなめたりさわたりす
る行動の内に『字び』がひそんで
いる、

言葉より文字より前にささやかな何故？が芽ばえる。その何故どうしての木は枝葉を茂らせ花を咲かせ広く根を張り、実りを待つ。それから少し成長した子供は意味のない行動によつて傷つき痛みを負う。そこにすでに学びがかくれている。そして成人となった私たちが人間は知りたがる動物だ。理由は何一つ無く、何の役にも立たないが知りたがりどこまでも手探りし問い続け、かすかな光へと歩む道の疲れを喜びに変える。さらに老人は喜怒哀楽に、際限のない言葉の列に、変幻する万象に学んできた。そしていま自分の無知に学んでいる。世界とおのが心の限らない広さ深さを」というものである。生まれ落ちたときから人間は死ぬまで本能的に「知」を求めずにはいられない動物で、しかも最後まで無知のままなのだが、そこからも世界と自分の心の広さと深さを学んでいるという人間賛歌である。たいへん良くできている考えさせられる詩で、正月から何となく明るく希望の湧く思いであった。

問うことと答えること

ところが、この素晴らしい詩ですら見劣りがするぐらい『詩と死をむすぶもの』の内容は鮮烈である。簡単に言うと、臨床体験を歯に衣着せぬ率直さで語る経験知の徳永に対して、方や、様々な本やインターネットからの

引用や知識の紹介をしたりしてそれに依拠する教養主義的な谷川との遣り取りが見物で、面白い。病院の臨床と言つても、生還させるだけではなく死を看取る役目の医者なので、そこには死に逝く病人の思いと、それを取り巻く家族の人達の思いとが当然ながら克明に活き活きと描写されているのである。徳永医師の観察眼には畏れ入るばかりである。病人同士の会話や看護に來た家族の会話など、それはそれは精密精緻に記録されている。夫が死んだことを信じられないまま、生きていると思ひ込もうとしている少々認知症がかつた老婆の話などは、その語り口の巧みさもあつて笑えたりしてしまうのだが、「お父さん、嘘だろう。起きなんせえな」「手は冷たいけど、これ、胸はこんなにぬくい。違う、生きたりまず、これ、みなんせえ」という件では、徳永の出身地かつ仕事場の鳥取の方言とも相俟つて、思わずほろりとさせられる。

「死」は「詩」に通ずる

往復書簡と言つても、まず、徳永医師の臨床体験の報告があつて、それに谷川が答えるという形をとっている。だが中には谷川の方から問題提起をし、それに当てはまるような症例を徳永が紹介し応える章もある。例えば、〈徳永さん、「死がない」は「詩がない」に通じますね。死と詩がない暮らしは「しがない」

暮らしです。…」で始まる「消えようとするとき」という章では、『ゲド戦記』の作者ルルグウインのエッセイ集『ファンタジーと言葉』の中から次の一節を引用して徳永に問題提起している。「ウォルター・オングは言う。〈音は、それが消えようとするときにしか存在しない〉同じことを生について言うこともできるだろう。〈生は、それが消えようとするときにしか存在しない〉徳永さんが記録し続けているのは、〈消えようとするときにしか存在しない生〉だと思う。ある意味で、もつとも充実し、もつともドラマティックな、つかの間の生。」そして谷川は六〇年前の自分の子ども時代の思い出を語る。どうしてこんな些細なことを思い出すのかという疑問形と一緒に。この谷川の書簡に徳永は「いい、いい。谷川さんは言葉のリーダーを持つておられる。」と賛辞を送り、さらに続けて、一九八三年に書かれた谷川の詩を思い出す。「一瞬は熟れきつたとき／永遠となる／言葉は熟れきつたとき／沈黙する／果実は熟れきつたとき／地に帰る／死を／熟れきつた生として／とらえること」

「生きてくれ」すぐその後は「死んでくれ」

そしてこの詩を契機として、三年前69歳で肺ガンにより亡くなった男性とその家族の臨床体験を語り始めた。奥さんと息子のお嫁さ

んががこの男性の付き添いとして死ぬ直前の男性の病室にいたが、35歳の息子は、現在拘留所に収監されていて出所手続きがなかなか下りないとのこと。医師の診断書の提出までしたが許可は難しい状況にあった。しかしやっと許可が下りて息子がこの病院に向かうとの知らせ。徳永医師は臨終に合うよう祈る。「血圧よ、これ以上下がるな、少しでも生きて欲しい。生命現象よ続け、と思った。そして二人の屈強な監視人に付き添われた息子が到着し、お決まりの対面が済んだ。しかしお別れをするためには、息子の外出許可が下りている時間内に父親には死んで貰わなければならぬ。監視人はもう時間だ早くしろと急かすのだが、父親はなかなか旅立たない。徳永はもう30分あと10分と小刻みに時間延長を願う出る。そして今度は「さあ、死よ来たれ、生命現象よ、終われ、死んで」と祈った。そしてやっと父は死に、息子は今際の別れが出来たのだった。さっきまでは「生きろ、生命現象よ続け」と言っていたのに全くその逆の立場の願いを持ったのだ。いくら生者の為といえ、これほどに変わってしまうものなのかと、徳永は素直に誠実に振り返っている。「床って何だろう」と。亡くなった途端、廊下では拍手が沸き起こったという。「死んで拍手」という体験は初めてだと記す。兎に角まじい臨床体験ではある。患者とその家族を

観察することがとりもなおさず、「生」と「死」を見つめることでもあった。この本の面白さは、生と死の狭間にいる人達への静かで暖かいリアルな眼差しを通しての徳永の正に臨床ライプとも言える迫真の語り口と、谷川の求道的とも言える徹底した知性の発露としての言葉の多彩さとの掛け合いの妙である。私最近では久し振りに感動した本である。諸君もどうか、図書館でこの本を手にとってじっくり読んでみて文章と詩の内容の素晴らしさを味わって欲しい。

強靱なる肯定の思想

国語科 青木 隆

ウシュヴィッツ解放時には生存者は七六五〇名、その中には病人が多く、一〇日後には五〇〇名を切ったという。生き延びたごくわずかの人々の中にフランクはいた。

フランクは一九〇五年ウィーンに生まれ、フロイドとアドラーに師事して精神医学を学んだ。第二次大戦下、ナチスによって家族ともども強制収容所に送られ、妻子を失った。そのときの体験を綴ったのが『…それでも生に然りと言う』という書物に収められる「心理学者、強制収容所を体験する」という文章である。日本では最初その体験記だけが霜山徳爾氏によって『夜と霧』という題で出版された（一九五六年、みすず書房）。その後残りの部分である三つの講演記録は『それでも人生にイエスと言う』という邦題で出版された（山田邦男・松田美佳訳、一九九三年、春秋社）。また『夜と霧』は原書の改訂を期に改訳され（池田香代子訳、二〇〇二年、みすず書房）、現在二種類の『夜と霧』を読むことができる。『夜と霧』ではアウシュヴィッツ強制収容所における凄惨としか言いようのない体験が客観的な筆致で綴られている。これほどの体験をしながら、これほどに理性的でいられるその姿に感動を禁じ得ない。彼が自暴自棄にならずにいられたのは、後にロゴセラピーとして結実する彼の人間存在・心理に対する把握・理解によるところが大きい

あろう。

フロイドが創始した精神分析では無意識というものが見出され、心の病の原因は無意識下であり、その部分を意識化することにより初めて病は克服され得ると考えられた。しかし心の闇のどの部分に注目するかは精神分析家によって異なり、フロイドは幼児期からの性的な抑圧に注目し、アドラーは劣等感に注目した。そしてフランクは生きる意味の喪失、つまり絶望感に注目した。彼の精神療法はロゴセラピーと呼ばれるが、それが対象とするのは神経症の二〇％にすぎないらしい。しかしそれは自殺願望やアルコール依存症・薬物依存症などに効力を発揮するので、現代的な意義はより大きくなっていると言えるであろう。「生きる意味」と聞くとわれわれは人生の中で「何を得るか」ということであろうと考えてしまうが、そういうことは本当の生きる意味にはならないとフランクは言う。そういう考えは一八〇度方向転換させなければならぬと言いが、これ以上のことはここでは敢えて書かない。関心のある人はぜひ彼の著作そのものを読んで欲しい。

昨年六月に秋葉原で無差別殺傷事件が起きたが、その事件の背後に立ち現れるやりきれないニヒリズムを見るにつけ、今日フランクの思想はもっと注目されていいと感じる。彼の思想を述べる書はまず第一に『識ら

れざる神』（佐野利勝・木村敏訳、一九六二年、みすず書房）であろうが、この書は現象

学という哲学的方法を用いて書かれているので、かなり難解である。しかし幸いなことに近年、春秋社よりフランクの著作が次々と訳出され、その中には講演や対談の記録という易しいテキストも含まれている。『宿命を超えて、自己を超えて』（山田邦男・松田美佳訳、一九九七年）などをお勧めする。

最後にみすず書房と春秋社から出されているフランク著作集の書名を列記しておく。

みすず書房刊フランク著作集

『夜と霧』、『死と愛』、『時代精神の病理学』、『神経症』Ⅰ・Ⅱ、『精神医学的人間像』、『識られざる神』

春秋社刊フランク・コレクション

『それでも人生にイエスと言う』、『宿命を超えて、自己を超えて』、『フランク回想録』、『生きる意味』を求めて』、『制約されざる人間』、『意味への意志』、『意味による癒し』、『ゴセラピー入門』、『苦悩する人間』

人間機械論

社会科 安藤 浩一

数年前に、私は臓器のある部分の半分を切除する手術を受けたが、その切除された一部はどのように処理されたのが気になっていた。医療ゴミとして廃棄されたのか、それともすぐに焼却処分されたのだろうかなどいろいろ思いをめぐらしていたが、いまだにその事を担当医に聞くことはできずにいる。体生命に害を与えることになる部分として身体から排除されたのだが、その部位の行方を気にするということはやはり身体の一部であったものに愛着を感じていることなのだろうか。

人間は脳・肺・心臓・胃・腸・肝臓・腎臓等のパーツ（部品）から成り立っており、そのある部分が故障したら、一部を切除したり、人工臓器や他人の臓器を移植したりするなど部品を取り替えれば健康な人間としてより長く生きられると考えられている。また、健康に対する人々の関心が高まり、健康な人間の老化を抑えるためのアンチエイジング医学研究も発達して、老化防止のサプリメントや

グッズが販売され、人気を博している。

長生きすることは本当に幸せなのかという、読者にあまり歓迎されないテーマで、高齢者への医療や介護の実態を老人医療に従事する医師の立場から報告したのが久坂部羊著『日本人の死に時』（幻冬舎新書）である。筆者はまず元気で活躍している高齢者の実態のみがマスコミで報道されている問題点をあげ、一般的な老人が長生きするどのような障害が生じてくるのかを具体的に説明している。さらに老人医療の問題点、家族介護の大変さや様々な虐待、老人ホームや介護施設の長所・短所などを論じた上で、今必要なのは延命治療をおこない死を遅らせる医療ではなく、適当な時期に快適に死を迎えられるように援助する医療、すなわち死を支える医療の必要性を唱えているのである。また、何も考えずに長生きを求めるのではなく、自分で死に時を考えておくことが大切であり、それ以上生きたら余生と思つて生きるのがよいと提案している。本書は長生きで苦しんでいる老人たちの実態から、むやみに長寿を実現しようとして病気におびえながら日々を過ごすことが「しあわせ」にはつながつていない現実と、人間の不幸は生命の長さだけではかれないことを教えてくれる。

際限のない人間の長生き願望を肯定し、医療技術の進歩と、脳死を人間の死の判断基準

とする法律の導入などによって、他人の臓器をもらいうけてまでも生きられる時代になったことで、世界ではどのようなことが起きているのだろうか。

東南アジアの発展途上国の貧しい子供たちからの臓器提供により、日本人や欧米人が自分の子供に移植する臓器を買い求める臓器売買・移植と児童売春の実態を描いた梁石日著の小説『闇の子供たち』（幻冬舎文庫）では、貧しい子供たちの被っている悲惨な境遇がグロテスクで吐き気を催すような直截的な表現でこれでもかというほど描写されている。この問題は国家間の経済格差が人間の価値格差につながっている現実を衝撃的な描写で示している。

時事通信社外部記者の城山英巳氏が著した『中国臓器市場』（新潮社）では、臓器移植は日本国内ではドナー不足のため難しく、欧米諸国より安い値段で死刑囚ドナーの臓器提供と移植手術を行つてくれる中国に目を付けて、中国の病院と日本人の患者との間の臓器の提供・移植病院紹介を仲介する業者の存在やその業者を介して、中国の病院に入院して、高額なお金で臓器移植手術を受けた日本人の事例を調べ、その実態を報告している。

慈善の建て前のもと利益獲得のために仲介事業や移植手術に携わる業者や病院・医師たちと、裁判所などの国家機関が連携し、死刑

囚ドナーから移植希望者、特に政府高官・外国人・金持ちなどへ優先的に臓器を提供している状況と、その移植情報を知つた世界の様々な国から多数の外国人が中国に渡航している現実とが明らかにされている。

国内での移植実現が難しい状況下で、日本人の移植希望者の一部は、貧しさや生活苦を改善するために健康な臓器を提供するアジア諸国の人々の存在をあてにして、中国やフィリピンに渡航し大金を払い移植手術を受けて、いのちの維持や延命をはかっているのである。

いわば、今や人間は脳や臓器といったパーツを正常なものに交換して寿命をのばすことのできる「サイボーグ」のようである。健康で若々しさを保ちながら長生きすることへの際限のない欲望は何処まで突き進むのだろうかと恐ろしくもあり、悩ましい問題でもあると思つた。

『闇の子供たち』や『中国臓器市場』の二冊は資本主義経済のグローバル化による格差が生じている時代状況の中で、「いのち」の価値格差が生じている現実と、人間も機械と同じように取り替えや使い捨てが可能な存在になっている実態を読者に訴えていたような気がする。貧しい人々の生命が脅かされている現状に対して、我々ができることは何なのかを考えさせられた内容であった。

“いのち（生命）”の本

図書館・鳥居明久

“いのち（生命）”というテーマはとても幅広く、関連図書が多すぎて、ブックリストを作るのに困ってしまいました。そこで、今回は、見出しを付けていくつかにまとめ、簡単なコメントを付けて並べてみることにしました。見出しのつけ方はあくまでも便宜的なもので、他に適当なものがあることは言うまでもありませんし、並べてみたのは、あまりにもたくさんある“いのち（生命）”の本のほんの一部に過ぎません。

そもそも、宗教、哲学、思想、文学などをはじめ、いわゆる人文科学、社会科学は、人間が自らの“いのち（生命）”を、すなわち生きているということそれ自体を課題として生きざるを得ないところに成立しているわけですから、ほとんどが“いのち（生命）”の本であるとも言えるわけです。とりわけ、文学においては、人間のさまざまな生の有りようそのものがその対象となっているのですから、すべてにおいて“いのち（生命）”が問われ、描かれ、詠われていると言えましょう。したがって、以下のリストからは敢えて文学作品をは除いてありますし、「生きる意味とは」、「人生に意味はあるか」といった問いに答えようとする宗教、哲学、思想の分野の本もあまり含まれていません。

また、“いのち（生命）”の本について最大限に拡大して言えば、人間に限らず“いのち（生命）”あるものについて書かれたものは、すべて“いのち（生命）”の本だということにもなりますが、ここでは、やはり人間の“いのち（生命）”についての本に限定しました。さらに、人間を含めて、生命科学に関する本はとても多く、選ぶようもなかったため、自然科学的視点に限られた分野のものも以下には含まれていません。

そういうわけで、無謀な試みで、恣意的なピックアップに過ぎませんが、少しでも参考になればうれしいことです。

最後に、以下のなかから1冊だけここでも紹介しておきます。それは、「5. 医学・医療の限界のなかでの『いのち』日記や手記などから」という見出しのところに入っている、『15歳 いのちの日記』です。これは、麻布中学3年生の時に白血病で亡くなった飯田公靖君という生徒（生きていれば、生徒諸君の父親くらいの年齢になっています。）の本です。この機会にぜひ読んでみてください。

1. 「いのち」はどのように考えられてきたか

*生命観の探求／鈴木貞美／作品社／114.2-Su

- ・「生命」をわれわれがどのように捉えてきたかについて、日本の近代のみならず古今東西の精神的営為を渉猟しつつ、新たな生命原理主義を樹立しようとしています。なお、筆者には、この本をベースにした『日本人の生命観』（中公新書）もあります。

*宗教と生命倫理／小松美彦ほか／ナカニシヤ出版／490.1-Ko

- ・キリスト教、イスラーム、仏教、ヒンドゥー教、儒教、神道における死生観から、現代の生命観を捉え、現代の生命倫理を問うています。

*生命観を問いなおす／森岡正博／ちくま新書／490.1-Mo

- ・「エコロジーから脳死まで」という副題で、現代の生命と自然の問題は、われわれ自身の生命の欲望にどう立ち向かうのかということだと説いています。

2. 「いのち」と「いのち」との出会い・交流

*子どもたちの命／鎌田實、佐藤真紀／岩波ブックレット／081-I-677

- ・長年にわたる医療支援の体験から、戦乱のなどの厳しい現実にも直面しながらも、それを乗り越えていく子どもたちの可能性、そして、命の尊さについて語っています。

*いのちの対話 1, 2, 3／鎌田實ほか／岩波ブックレット／081-I-729,732,741

- ・1は「医者と患者の絆」という副題で、鎌田實、日野原重明、舘野泉、村上信夫、2は「死に方上手」という副題で、鎌田實、山折哲雄、嵐山光三郎、加藤登紀子、村上信夫、3は「大人と子どもの絆」という副題で、鎌田實、水谷修、大平光代、新沢としひこ、村上信夫が座談を行っています。

*みんな地球に生きるひと 1, 2, 3／アグネス・チャン／岩波ジュニア新書／081-I-J-129,274,554

- ・中国桂林のおじいさん、災害にあった子どもたち、戦乱を生きる少女など、世界中のさまざまなひととの交流を通じた「生きること」の体験が報告されています。

*ぼくたちは生きているのだ／小林茂／岩波ジュニア新書／081-I-J-540

- ・障害を持つことになったドキュメンタリー映画作家が自らの半生を振り返りつつ、映画を介して出会った人びとを通して「生きている」ということについて考えています。

*赤ちゃん力／高塚人志／エイデル研究所／375.5-Ta

- ・小、中、高校生が赤ちゃんとふれあうことで、人間関係の基礎を育み、「いのち」の尊さを実感することができるという、「赤ちゃん力」についての実践と報告です。

3. 「いのち」あれば悩み、苦しみあり

*いのちはなぜ大切なのか／小澤竹俊／ちくまプリマー新書／081-ChS-067

- ・子ども達が自分や人を傷つけないために、どんなケアが必要なのか？ ホスピス医による、「いのち」の意味を考える「いのちの授業」です。

*幸せになる力／清水義範／ちくまプリマー新書／081-ChS-078

- ・生きづらい現実のなかで、どのようにしたら自分の「いのち」を受け止めて、幸せになれるのか。その「力」について語っています。

*みんなのなやみ 1, 2／重松清／よりみちパン！セ／081-Yo-001,012

- ・なやみのない人生などない。悩みを消し去るのではなく、なやみとの付き合い方をと一緒に考えようという、10代の悩み相談室です。

*寂しさの授業／伏見憲明／よりみちパン！セ／081-Yo-004

- ・どうしたら自分が「生きられる場所」をみつけていくことができるのか。「世界」と「自分」の間に生じる亀裂に対して向き合っていく方法を提案しています。

*〈いのち〉のメッセージ／若林一美／ナカニシヤ出版／114.2-Wa

- ・われわれはどのような時に「生きる」ことを意識するのだろうか。暮らしのなかで出会うさまざまな「いのち」の問題について証言と事例を通して考えています。

*いのちの応援団 I、II／山本文子／晩聲社／367.9-Ya

- ・長年の助産師の経験をもとに、性の問題を「いのち」の問題として中高生に語りかけている筆者のお話しとそれに対する中高生からの声が収められています。

4. 生命科学・医学・医療技術の進展のなかでの「いのち」

* 岩波応用倫理学講義 1 生命／中岡成文ほか／岩波書店／150.8-O-01

・脳死、延命治療、遺伝子操作など、科学・技術がもたらした生命にとっての新しい現実について、現場で苦闘する人々とともに考えています。

* 生命学に何ができるか／森岡正博／勁草書房／490.1-Mo

・脳死を「人と人との関わり方」の問題として提起したり、生命倫理をフェミニズム運動や「内なる優生思想」から考え直し、新たな生命学を模索しています。

* 「尊厳死」に尊厳はあるか／中島みち／岩波新書／490.1-Na

・病院での人工呼吸器取り外し事件を取り上げ、尊厳死問題とともに、終末期医療に真に求められていることは何かを問いかけています。

* 脳死・臓器移植、何が問題か／篠原睦治／490.1-Sh

・脳死、臓器移植問題を、障害児（者）問題、尊厳死問題を考える角度から、「死ぬ権利と生命の価値」論として論じ、問題点を明らかにしています。

* 弱くある自由へ／立岩真也／青土社／490.1-Ta

・自由とはなにか、自己決定とはなにかという問いを根底に据え、安楽死、遺伝子治療、介護保険、臓器移植などの問題を通して現代社会のなかの生命について考えています。

* いのちの始まりと終わりに／柳澤桂子／草思社／490.1-Ya

・代理母、クローン、臓器移植から安楽死まで、生命をめぐる環境の変化を見すえる生命学者が、生と死の倫理を問い、「いのち」本来のあり方を考えています。

5. 医学・医療の限界のなかでの「いのち」一日記や手記などから

* 生きる力／「生きる力」編集委員会／岩波ブックレット／801-I-689

・ALS（筋萎縮性側索硬化症）という運動神経系麻痺の難病に罹り、生きるということ自体と直面せざるを得ない人びとの文章です。

* 15歳 いのちの日記／飯田公靖／集英社文庫／289.1-I

・麻布学園中学3年の5月初めに、白血病であることがわかり、翌年の1月2日に亡くなった生徒、飯田君の闘病日記、彼の家族や周囲の人びとから寄せられたことばなどです。

* 僕に死ぬ権利をください／ヴァンサン・アンペール／NHK出版／490.1-H

・全身麻痺となり、大統領に安楽死を認めてくれるように訴えたが、認められずに母の手を借りて命を絶ったフランス人青年の手紙、手記です。

* 1リットルの涙／木藤亜也／エフエー出版／493.7-Ki

・知能には全く障害が起きず、体が不自由になってしまう脊髄小脳変性症という難病に罹りながら、手が動かなくなるまで書き綴られた日記です。

* 生命かがやく日のために／斎藤茂雄／共同通信社／493.9-Sa

・赤ちゃんが重大な障害をもって生まれてくるなら、親や家族、そして社会はどのように対応するのか。その現実を綴ったルポルタージュです。

* 天国で君に逢えたら／飯島夏樹／新潮社／494.5-I

・末期ガンのために余命宣告を受け、38歳で他界したプロウィンドサーファー、飯島夏樹のエッセイ。『ガンに生かされて』、『神様がくれた涙』と続く。

6. 「いのち」についての政治と法律

* 生命の政治学／広井良典／岩波書店／ 311-Hi

・「福祉国家・エコロジー・生命倫理」という副題で、「生命」に関わる問題領域でありながら、個別に論じられてきたことをトータルに考えようとしています。

* 生命の刑法学／上田健二／ミネルヴァ書房／ 326-U

・「中絶・安楽死・自死の権利と法理論」という副題が示すとおり、刑法における生命保護がドイツの事例を検証しながら、比較法的観点から論じられています。

7. 現代社会の殺人や出来事から問われる「いのち」

* 魂の虜囚／江川紹子／中央公論新社／ 169.1-E

・「宗教」の名において行われた地下鉄サリン事件という無差別殺人。「いのち」を奪うことを正当化した集団、個人を読み解こうとしています。

* アキハバラ発／大澤真幸編／岩波書店／ 368.6-O

・「誰でもよかった…」と語られた秋葉原の無差別殺傷事件。無惨に「いのち」が奪われる事件についての研究者、作家、ジャーナリストたちの発言です。

* いのちの尊厳／「名古屋御坊」編集部／風媒社／ 188.7-Na

・名古屋御坊新聞（真宗大谷派名古屋別院刊）に「いのちの尊厳」というタイトルで連載された27の文章を集めたものです。

* 死刑／森達也／朝日出版社／ 326.4-Mo

・殺人という「いのち」奪う行為。その殺人犯の「いのち」を奪うことが許される死刑。死刑問題を通して殺すこと生かすことを考えています。

〈図書館より〉

◆ 今年度のブックフェアのテーマは「いのち（生命）」です。テロや戦争が繰り返されたり、「殺すのは誰でもよかつた」という無差別殺傷事件が起こったり、救急車がたらい回しにされたり、医学の進歩のなかでの難問に出会っていたり、不況のなかで明日の生活の手段が奪われたりして、自分の「いのち（生命）」も他人の「いのち（生命）」もわからなくなってしまうような現代社会において、改めてさまざまな角度から「いのち（生命）」について考えてみようと思いました。そう思っ、世の中を見回してみると、「いのち（生命）」について論文募集があったり、今年の歌会始のお題が「生」であったり、「HEBES BEAUTIFUL ～小さないのちの詩」というドキュメンタリー番組が話題になったりして、時代に要請されているテーマでもあったなと思っています。

◆ 今回のテーマは、幅が広く漠然としていて、書きにくいだろうなど、申し訳なく思っていました。幸にも九人の方から原稿をお寄せいただきました。結果として、まさしくさまざまな角度から「いのち（生命）」について考えるヒント、手がかりが与えられたと思います。寄稿していただいた教員の方々、ほんとうにありがとうございます。

◆ 今年度は、この「図書館だより」以外の企画としては、「いのち（生命）」に関連する映像・映画を観ることその他に、仏教の研究者でもある青木先生（国語科）から、「仏教の生命観―『いのちの食べ方』、輪廻転生、臓器移植」と題して、お話を聞く機会が得られることになりました。よく知らないことをお話しただけ、めったにない企画ですので、生徒諸君はぜひ参加してください。

◆ 生徒からの投稿も期待していましたが、残念ながら実現しませんでした。「図書館だより」でも、「衣錦尚褻」と同様に生徒諸君からの投稿を受け付けていますので、次回には是非投稿してみてください。